

◆ 書 評 ◆

藤 原 知 著 「運動解剖学」

本書は、著者の緒言にあるように、その目標を身体諸系統を“運動”の一点に照準を定めて統一的に把握し、運動の射程のうちにあるものをすべて動員し再構築することを方法論として生れたという。

したがってその成り立ちは、人間運動の特性としての直立姿勢から説きおこし、基本的な投てき動作、指運動、水泳飛びこみなどの分りやすい例を挙げつつ姿勢反射、協調運動、随意運動、自動調節機構につきふれ、人間発育段階、その指標となる諸反射に及び、また運動の性質をのべている。第Ⅱ、Ⅲ章は主として神経学的な考察で、ニューロンとシナプス、運動終板、筋紡錘などのきわめて興味深い最新の知見、殊にγ-運動系の説明は運動ニューロンが伸展受容器からの複雑なフィードバック機構により調節を受けていることともに興味ある所である。

中枢神経系の説明も、理解に便なようにその発生学からとき、形態学的な記載運動におけるその役割を適切な図説により詳細に述べてある。第Ⅳ章はいわゆる運動学に属する項目であり、脊柱、上肢、下

日本医科大学整形外科 石 田 肇

肢につき、著者特有な適切な表現をもって説明されている。本書の特徴は何といても形態学的な解剖学と機能的な運動学をたくみに結びつけた点であり、このような至難のわざは、該博な知識経験のある著者にしてはじめてなされたという感が深い。私自身、一介の整形外科医として常日頃かかる成書の出現を待ちのぞんでいたものの一人であり、書評を書くにあたり、その内容の豊富な余り、一読するに1カ月近くの時間を費してしまった程である。

本書はほとんど各頁に図説があり、この当を得た図説も、その特色の一つとして挙げられよう。

諸外国には、ホルンスベッドや、スタインドラーの機能解剖学や、運動学、また臨床的にはカリエのいたみシリーズなどの類書を見るが、本書はこれらの名著を凌駕する名著と思われ、広く江湖の諸賢に愛読されんことを望み、浅学の身をかえりみず推薦する次第である。

医歯薬出版 / B 5 版 / 282 頁 / ￥ 4,500 / 千 170